

誤用例から何を学ぶか

山下 明 昭*

0. はじめに

本稿は、諸外国からみえられている研究生や留学生に教養教育としての日本語を指導する中で、学生の誤用例から学んだことを述べたい。

中級段階における複文文型を指導するのに、国立国語研究所から出版されている日本語教育指導参考書15の『談話の研究と教育Ⅱ』『基礎日本語辞典』にそって指導した。しかし、指導していて、矛盾点に遭遇した。当初は、中間言語の問題であると考えていたが、指導書や辞書の説明の方に問題があるのではないかという仮説に至った。この仮説を明らかにしたい。

問題の箇所は、指導書の第4章の1.～でも2.～から3.～し4.～たり5.～たら6.～なら7.～と8.～ば9.～けど、～けれども10.～のに11.～ては12.～ても13.～なんて、のなかの接続形式「のに」「けれど」についてである。

永野賢(1985)、森田良行(1980)の先行研究において「のに」は、客観的。「けれど」は、主観的とされてきた。しかし、国立国語研究所の日本語教育指導参考書15の『談話の研究と教育Ⅱ』のP98には意味の説明において「のに」は、現在起こっていること、すでに完了した事柄について用いられ、前件の行為、状態があるけれども、それに反して後件の事柄が行われたことに対する表現主体の不満、残念、遺憾の気持ちを表したもので、「のに」の直前には動詞、形容詞のル形、タ形がおかれ、形容動詞、名詞もおくことができるが、その場合には{形容動詞/名詞} + {な/である/だった/であった}の形となる。と説明されている。「けれど」について指導書のP35では、終助詞的。逆接。倒置の用法。前置きの。終助詞的に表現を婉曲にしたり和らげたりする働きがあると述べられている。また『基礎日本語辞書』P909では主観的と記されている。

しかし、一方で「のに」は客観的とし、一方で表現主体の不満、残念、遺憾の気持ちを表すというが、客観的と表現主体の不満、残念、遺憾の気持ちを表すというのはあい矛盾するのではないか。

*講師 教育学部(日本語・日本事情)

I. 学生の誤用文から

- (1)○日曜日なのに働いている。
- (2)○日曜日だけれど働いている。
- (3)×一人で大変だと思うのに、頑張ってください。
- (4)○一人では大変だと思うけれど、頑張ってください。
- (5)○なぜ、知っていたのに、教えてくれなかったの？
- (6)×なぜ、知っていたけれど、教えてくれなかったの？

上記の「のに」「けれど」のこのような用法の使い分けや誤用文をどのように説明すればよいか、以下、意味・用法の異同をみていくことにする。

II. 意味・用法

II. 1. 逆接

- (7)○来ると言っていたのに、彼は来ませんでした。
- (8)○来ると言っていたけれど、彼は来ませんでした。
- (9)○この紙は薄いのに、破れにくいです。
- (10)○この紙は薄いけれど、破れにくいです。
- (11)○彼の住んでいるマンションは、家賃が高いけれど雨漏りがする。
- (12)○彼の住んでいるマンションは、家賃が高いのに雨漏りがする。
- (13)○彼の住んでいるマンションは、家賃が高いけれど駅前だけあって便利だ。
- (14)×彼の住んでいるマンションは、家賃が高いのに駅前だけあって便利だ。

「のに」は逆接の接続助詞として働く。「のに」の後件には、話者が前件から予想した事態とは異なる「期待に反する事態だ」ということを「認めた表現」がくる。

「けれども」も逆接の接続助詞として働くが、勿論(11)のように前件と衝突するような事柄が後件に来るとともに、(13)のように前件と衝突するような関係のない事柄が後件に来ることもできる。では(13)はどうして逆接なのかというと「家賃が高い点は良くない」という評価と「便利で良い」という評価が相異なっている点においてである。

「のに」の場合は、「事柄として」の衝突がなければならない。(14)のように評価のみが相反する場合は使えない。また(7)(12)のようにマイナスのニュアンスの表現だけでなく、反対に(9)のようにプラスのニュアンスのものも表す。

II. 2. 前置き・断り書き

- (15)○うちの花子が言っていたけれど、学校にいやな奴がいるんだって。
- (16)×うちの花子が言ったのに、学校にいやな奴がいるんだって。

(17)○「もしもし、山下さんですか」「はい、山下ですけど」

(18)×「もしもし、山下さんですか」「はい、山下ですのに」

また、「けれど」には、(15)のように逆接とはいえ、「前置き・断り書き」とでもいうべき用法もあるが、「のに」にはこのような用法はない。(17)の「はい、山下ですけど」もこのような前置き・断り書き的な用法だといえる。(17)の「山下ですけど」の後にはおそらく「お宅はどなたですか」「何のご用ですか」のような相手の返答を促す表現が予想され、それが省略されていることによって、婉曲的なニュアンスを生むことになるのであろう。このような用法は、婉曲用法とか終助詞的用法と『談話の研究と教育Ⅱ』ではいわれる。

(19)○そろそろお時間ですけど。(始めていただけますか)

(20)×そろそろお時間ですのに。(始めていただえますか)

上の(19)も同じ用法である。「のに」には上の(20)のように、そのような用法はない。

II. 3. モダリティ制限

a. 「のに」「けれど」の前の述語のモダリティ制限

(21)○雨が降っているけれど、傘もささずに歩いている。

(22)○雨が降っているのに、傘もささずに歩いている。

(23)○苦労しただろうけれど、結果はよくなかったね。

(24)×苦労したるうに、結果はよくなかったね。

「けれど」は終止形につき、既定事態だけではなく推量的な事態を条件として示すことができるが、「のに」は、いわゆる「不変化助動詞」(ほとんど終止形でしかもちいられない推量の助動詞)の後にはつきにくい。「のに」は、普通、既定的な事態しか条件として示すことができない。それで(24)は、まともな文と認めがたい。

b. 「のに」「けれど」の後件の述語のモダリティ制限

(25)日曜日 (○なのに／○だけれど) あの人出勤している。

上の文の述語を「出勤しているようだ」(根拠に基づく推定)「出勤しているようだ」「出勤しているのだ」「出勤しているのだろう」「出勤していますか」にかえても「のに」「けれど」ともに自然な文として成り立つ。

しかし、

(26)○日曜日だけれどあの人は出勤しているだろう。(主観的な推量)

においては、前件を「日曜日なのに」とするとこの文は不自然になる。同様に述語を「出勤しているかもしれない」「出勤しよう」「出勤してください」「出勤しろ」としても「けれど」は自然な文を作るが、「のに」の場合には不自然になる。この場合に「けれど」が自然で「のに」が不自然であるのは、文末が推量・勧誘・依頼・命令になると前件と後件が衝突する事態であることを認める表現とはならず、前件が「前置き・断り書き」のニュアンスを帯びるからである。

(27)○子供なのにアルプスに登るな。

禁止は、命令などと同じように相手に対する働きかけを含んでいるが、「～のに」の後件として成り立つ。

命令は、前件と後件が衝突する事態であることを認める表現とはならないが、禁止は、前件と後件が衝突する事態であることを認めて、それは、駄目だからそうならないように後件のその動きを阻止しようとする表現として、論理的にも成り立つ。

Ⅲ. 連帯形接続と終止形接続の意味

「のに」は連帯形接続、「けれど」は終止形接続である。だから(7)は、

(7')×来るといっていた。のに、彼は来ませんでした。

のように切ることは出来ない。一方(8)は、

(8')○来るといっていた。けれど、彼は来ませんでした。

のように切ることが出来る。「けれど」は、接続助詞と接続詞の両方の用法がある。「のに」は、接続詞としての用法はない。

(6)が、なり立たないのかを次に考えることにする。

(5)○なぜ、知っていたのに、教えてくれなかったの？

(6)×なぜ、知っていたけれど、教えてくれなかったの？

(5)の「知っていたのに」の「のに」の前の「知っていた」は連帯形である。連帯形は、話し手の主張としての判断は含んでいない。それで「知っていたのに」は、「教えてくれなかったの」と同様、既定事実の表現になっていて、文末の疑問の気持ちは「なぜ」だけに向かっている。

一方、(6)の「知っていたけれど」の場合は、「けれど」の前が終止形であり、話し手の判断の主張になっている。そのため「知っていたけれど、教えてくれなかったの」の全体が既定事実となっておらず、文末の疑問が「なぜ」にだけ純粹に向かうとはいえない。それで(6)は、十分に成り立たないのである。

もし、相手が

(28)○私は知っていたけれど、教えてあげなかった。

と言ったのを受けて、(6)の「なぜ、知っていたけれど、教えてくれなかったの。」という表現がなされたとすれば、それは、かなり許容される表現になる。その理由は、この場合には「知っていたけれど教えてくれなかったの」が、全体として既定事実とみなしうるからであろう。

まとめ

これまでみてきたように「のに」は客観、「けれど」は主観というのではない。「のに」の後件には、話者が前件から予想した事態とは異なる「期待に反する事態だ」ということを「認めた表現」がくる。そして、不満、不思議、意外という意味が繋がるのである。また、「のに」の前件、後件には「事柄として」の衝突がなければならず、評価のみが相反する場合は使えない。また、マイナスのニュアンスの表現だけでなく、反対にプラスのニュアンスも表すのである。

「けれど」は、全体が主観的にというのではなく、「けれど」の前件と衝突するような事柄が後件に来るとともに、前件と衝突するような関係のない事柄も後件に来る。「けれど」は「けれど」のすぐ前の事柄について、話者が判断したものである。

参考文献

- 時枝誠記 (1941) 『国語学原論』 岩波書店
 時枝誠来 (1950) 『日本文法 口語篇』 岩波書店
 土部 弘 (1951) 「連体格から連用格へ—所謂「に」に通じる格助詞の「の」の一解」『関西大学国文学会』 第四号
 永野 賢 (1958) 『学校文法概説』 朝倉書店
 佐治圭三 (1970) 「接続詞の分類」『月刊文法』 2-12
 佐治圭三 (1993) (「の」の本質—「こと」「もの」との対比から—『日本語学』 12-11
 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 大修館書店
 鈴木 忍 (1978) 『文法 I 助詞の諸問題 1』 凡人社
 西原鈴子 (1985) 「逆接的接続における三つのパターン」『日本語教育』 56
 岩沢治美 (1985) 「逆接の接続の研究」『日本語教育』 56
 仁田義雄 (1991) 『日本語のモデリティと人称』 ひつじ書房
 仁田義雄 (1995) 『複文の研究』 (下) くろしお出版
 国立国語研究所 (1988) 日本語教育指導参考書15の『談話の研究と教育 II』
 森田良行 (1993) 『基礎日本語辞典』 5版 角川書店
 今尾ゆき子 (1994) 「ーガ／ケレド／ノニ／クセニ／テモ」『日本語学』 13-9 明治書院